

唐の繁栄 — 耐久高校に伝わる『貞観政要』 —

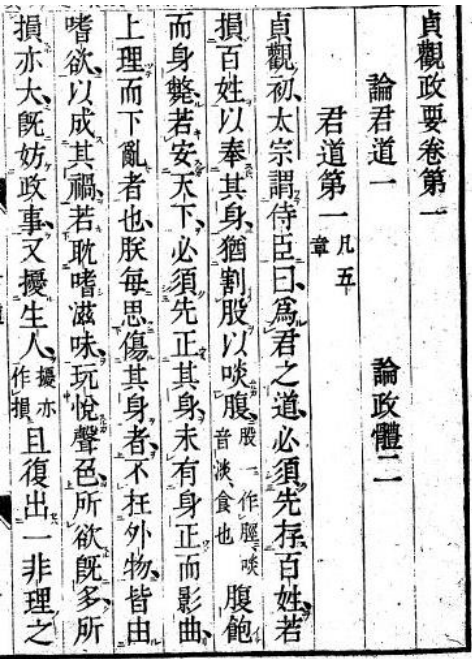
7世紀、東アジア・中央ユーラシアの広大な領域を支配する唐が成立します。その繁栄を築いた2代皇帝太宗（^{たいそう}李世^{りせい}民）と重臣の議論を記録した『貞観政要』の内容をみていきます。また、「耐久梧陵文庫」（和歌山県立耐久高等学校所蔵）に含まれていた『貞観政要』の来歴を通して、紀州を中心に江戸時代の藩校教育や儒学教育についてみていきます。

1 資料

【資料1】『貞観政要 一』

【意識】 石見清裕訳『貞観政要全訳注』講談社、2021年より抜粋

[*資料のデジタル画像を見る](#)



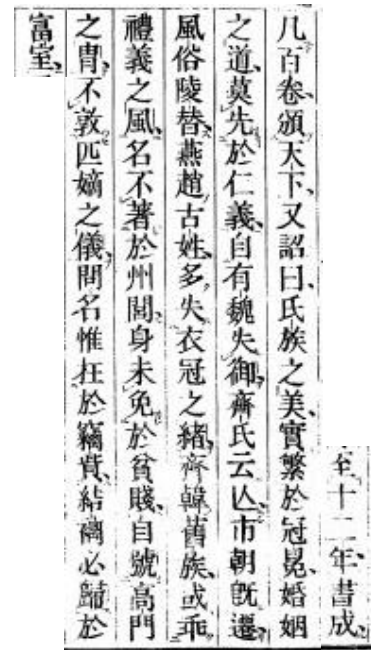
第一章 君主たるの道

貞観年間（六二七〜六四九）の初め、太宗が側臣に向かつて言った。「君主たるの道というものは、必ずやまず民衆を憐れまなければならぬ。もし民衆を損なつて、君主の道に奉仕せよとするのであれば、それは自分の股の肉を割いて自分で食うようなものだ。満腹になつても、死んでしまふであらう。もし天下を安泰にしようとするなら、君主は必ずまず自分の身を正すべきである。身が正しいのに影が曲がついていたり、上が治まつているのに下が乱れたりすることは、いまだかつてなかった。私はいつとも、自分の身を損なう要因は外からのものにあるのではなく、災いはみな自分の欲望によつて起こると思つてゐる。もし美食に耽り、音楽と女色を喜んでいれば、欲するものを多く手に入れたとしても、費用もまた大きい。それは政治を妨げ、人民を乱すことになる。

【資料2】『貞観政要 七』

【意識】 石見清裕訳『貞観政要全訳注』講談社、2021年より抜粋

[*資料のデジタル画像を見る](#)



貞観十二年（六三八）になつて、全百巻に及ぶ『氏族志』が完成し、それを天下に配布したのだつた。その後、太宗は次の詔を発した。「家柄の美德は、すべて現國家の官位を有しているかどうかにかかつてゐる。婚姻の道義は、まず仁義が通つてゐるかどうかを第一とするものである。北魏の統治が乱れ、北齊が滅亡してからというもの、朝廷は西に移り、それまでの風俗は次第に衰えた。中国北部の古い家柄は、多くは官職に就く道を失ひ、東方の古い一族は、礼儀の風習に背くようになった。地元では大して名声もなく、その身は貧困だといふのに、自分は伝統ある高貴な血筋だと誇り、婚姻の礼儀をないがしろにして、ただ財貨を手に入れることだけを狙ひ、娘を金持ちに嫁がせることだけを考へてゐる。

2 解説

(1) 唐の繁栄

3世紀の後漢滅亡後、南北朝の分裂状態にあった中国を統合した隋にかわり、618年に東アジア・中央ユーラシアに広がる帝国の唐が成立しました。隋と唐の支配層は、遊牧民の鮮卑拓跋部をルーツとする者が多数だったため、拓跋国家と呼ばれます。隋唐の時代は、漢人が生み出した中華の思想を受け継ぎつつも、多様な文化が融合する国際色豊かなものとなりました。制度面では、北魏で行われていた戸籍をもとに民衆に土地を支給する均田制など過去の北朝の制度を多く受け継いでいました。

(2) 太宗(李世民)

隋の滅亡以降の混乱を収めた唐の2代皇帝太宗(李世民)のときの唐は、北方の東突厥を従え、西方のチベットと友好関係を築き、「世界帝国」として繁栄しました。後世、太宗は名君とされ、その治世は「貞観の治」と呼ばれました。一方、太宗と対比させるため、隋の滅亡時の皇帝である煬帝には暴君のイメージがつけられました。

(3) 本資料について

①『貞観政要』

『貞観政要』は、唐の歴史家である呉兢が編纂したものです。呉兢は7世紀末の武則天(則天武后)が皇帝のときに国史編纂事業に携わり、その後、「開元の治」と呼ばれる国政改革を進めた皇帝である玄宗に『貞観政要』を進呈しました。本書は、君主のあり方について、太宗と重臣たちとの問答形式で記されています。

資料1には「君主たるの道というものは、必ずやまず民衆を憐れまなければならない。もし民衆を損なって、君主の身に奉仕させようとするのであれば、それは自分の股の肉を割いて自分で食うようなものだ。満腹になっても、死んでしまうであろう。もし天下を安泰にしようとするなら、君主は必ずまず自分の身を正すべきである。」と記されています。中国の政治思想には、皇帝は天から天下の支配を委ねられた天子だとされ、天子の行いが悪ければ革命によって王朝が交代する易姓革命という考えがあり、この文章にはその影響がみられます。

本資料の各項目の表題には、「仁義」、「忠義」、「孝友」、「礼楽」といった儒教において重要とされる語句が多くあり、儒教の影響を強く受けていたことがわかります。儒教は、家族道徳を基本にして礼による社会秩序の維持を中心とする思想で、前漢以降の中華王朝の基本理念となりました。

資料2には「北魏の統治が崩れ、北齊が滅亡してからというもの、朝廷は西に移り、それまでの風俗は次第に衰えた。中国北部の古い家柄は、多くは官職に就く道を失い、東方の古い一族は、礼儀の風習に背くようになった。」と記されています。ここで批判されている「古い家柄」、「古い一族」とは、魏晉南北朝時代に勢力を伸ばした門閥貴族のことです。ここからは、唐の支配層が魏晉南北朝時代以来の貴族の対応に苦慮していたことがわかります。

②「耐久梧陵文庫」

本資料は、和歌山県立耐久高等学校に伝わる「耐久梧陵文庫」に含まれる資料の一つです。同校は、1852(嘉永5)年に濱口梧陵らが開設した「稽古場」が源流であり、これらの資料は長年、同校で受け継がれてきました。資料の多くは、明治時代に耐久学舎舎長・私立耐久中学校校主を務め、実業家・政治家として活躍した濱口容所(1862～1913)の蔵書です。

本資料は「南紀学習館蔵版」と呼ばれる版本で、紀州藩の藩校学習館の所蔵本を校訂して、1823(文政6)年に出版されたものです。江戸時代の諸藩は、藩士の教育のために藩校を設立し、そこでは儒学や武術を学んでいました。『貞観政要』は、全国の藩校で使用されており、江戸時代の日本は儒学教育が浸透していました。

3 活用のポイント

- **中学校社会〔歴史的分野〕の場合…B 近世までの日本とアジア**

B(1)古代までの日本における東アジアとの関わりの授業の際に「解説シートを読み、唐の特徴について考えよう。」と問いかけ、国際的な帝国として栄える唐について知り、その帝国と向き合う日本の外交について学ぶきっかけとすることができます。

また、B(3)近世の日本の授業の際に「なぜ紀州藩の藩校学習館では、『貞観政要』が使われたのだろう？」と問いかけ、『貞観政要』には儒教に関する内容が多いことに気づかせ、江戸時代の武士への教育に儒学が重視されていたことを学ぶことができます。

- **日本史探究の場合…C 近世の日本と世界**

C(3) 近世の国家・社会の展望と画期(歴史の解釈、説明、論述)の授業の際に「なぜ『貞観政要』が現在の耐久高校にあるのだろう？」と問いかけて「耐久梧陵文庫」の来歴を調べることによって、江戸時代には紀州藩を含む諸藩で儒学をはじめとする学問が奨励されていたこと、明治時代には耐久高校の源流である「耐久社」で漢学を重視した教育が行われていたことを知ることができます。この学習を通して、身近な学校の来歴や地域の歴史が日本史や世界の歴史に結びついていることに気づくことができます。

- **世界史探究の場合…B 諸地域の歴史的特質の形成**

東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質の授業の際に「なぜ資料1の内容が重要とされたのだろう？」と問いかけることで、儒教の理念に基づき皇帝を天子として位置づけることによって皇帝権力を正当化していることに気づくことができます。また、「資料2から唐における皇帝と貴族の関係はどのようなものだったのか考えよう。」と問いかけることで、唐代には魏晋南北朝時代以来の門閥貴族の権力が強く、皇帝がその権力を抑え込もうとしていることがわかります。これらから、小規模な家族を基盤とする社会を、皇帝が儒教の理念をもとに官僚を用いて支配するという中華王朝の目指した理想と唐代の実態の違いについて学ぶことができます。

4 出典

- ・【資料1】和歌山県立耐久高等学校所蔵 耐久梧陵文庫 整理番号 和 22-2-114-2『貞観政要 一』
- ・【資料2】同上 整理番号 和 22-2-114-8『貞観政要 七』

※文書群の詳細については、[「耐久梧陵文庫\(和歌山県立耐久高校所蔵\) 解説」](#)をご覧ください。

5 関連資料・ウェブサイト等

- ・[呉兢『貞観政要』\(国立公文書館デジタルアーカイブ\)](#)
…刊行が1600(慶長5)年の「伏見版」と呼ばれるもの。旧蔵者が江戸時代初期の儒学者林羅山。
- ・[「紀州の藩学と学問の興隆」『わかやま発見』\(和歌山県教育センター学びの丘\)](#)
…紀州藩の藩校学習館に関する記述。
- ・[「耐久梧陵文庫\(和歌山県立耐久高校所蔵\) Web 公開資料の解説」\(和歌山県立文書館\)](#)

6 参考文献

- ・和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世』和歌山県、1990 年
- ・呉兢、石見清裕訳注『貞観政要 全訳注』講談社、2021 年
- ・[玉置将人「県立耐久高校所蔵「耐久梧陵文庫」の保存と活用」\(『和歌山県立文書館紀要第23号』和歌山県立文書館、2021 年\)](#)